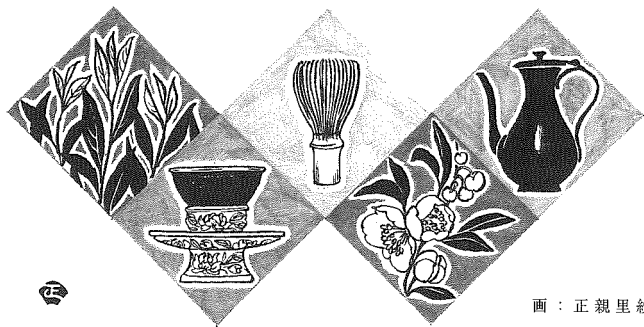


禪が伝えたお茶の話



画：正親里紗

第7回 道元禅師とお茶の話（上）

館 隆 志

皆さん、道元禅師をご存じでしょうか？日本における曹洞宗の開祖であり、また福井県にある大本山永平寺の御開山として知られています。

道元禅師は、京都の村上源氏という貴族の出身で、十四歳の時に比叡山で出家します。しかし、当時の比叡山での参学に満足することなく、園城寺（三井寺）の公胤僧正に参じます。そこで、公胤僧正から中国に禅宗があることを教えられ、入宋と禅寺での参学を勧められるのです。こうして、道元禅師は当時入宋経験があった荣西禅師を建仁寺に訪ね、入室して参問されたのです。その後、十八歳の時に正式に比叡山を下りて建仁寺に参じ、二十四歳の時に博多から商船に乗って入宋しました。

当時、日本から中国に行くには、博多で季節と風を待って、商船に乗って中国の明州慶元府（寧波）に行き、そこから上陸するのが一般的でした。道元禅師は、建仁寺での師匠である明全とともに入宋するのですが、二月

二十二日にはまだ京都で、そこから博多に行き、四月には明州慶元府に到着しました。道元禪師は正式な上陸許可が下りるまでは、港の船中にいたようですが、そこを起点に四月中にすでに諸山諸寺をめぐるにいたようですから、四月の早い時期に中国に到着していたのかもしれないね。

そんな折、一人の老僧が翌日の端午の節句で修行僧に食事を供養するために、貿易船に「倭榧」(シイタケとも、桑の実とも)を買いに来たのです。五月四日のことでした。老僧からしてみれば、お若い日本からの留学僧と思っただけかもしれません。しかし、道元禪師にとってみれば、初めてお会いした中国禅僧だったのではないでしょう。きっと、いろいろと質問してみたかったことでしょう。

おそらくは船中の一室だと思われませんが、道元禪師はその老僧を招き入れてお茶を差し上げました。そして、老僧にどちらの方かと尋ねると、阿育王山広利寺の典座とのことでした……。

これは、『典座教訓』という道元禪師が著した書物に記された有名なお話の導入部分です。典座というのは、禅寺で料理をする僧侶の職名で、大変重要な役割を担っている僧侶です。禅寺では料理をする和尚さんは六知事という役職の一つに位置づけられています。この典座というのは、禅寺にのみ存在する役職なのですが、この職の素晴らしさや心得などを説いたのが『典座教訓』です。

この導入部分のあと、いかに典座という役職が素晴らしいのかについて道元禪師の体験を踏まえた話をはじめります。話の続きに御興味のある方は、是非、『典座教訓』を読んでいたいただきたいと思います。今回とりあげるのは、この導入部分の「山僧、他を請して茶を喫せしむ」という一文です。道元禪師は、中国に正式に上陸する前に、すでに中国禅僧にお茶を差し上げているのです。

すなわち、道元禪師は、日本で茶を習い、日本から茶と茶器を持ち込んでいた可能性が示唆されているのです。そして、少なくとも、

禅僧を部屋に招いた際に、茶をいれることを知っていることになります。禅では入室参禅した際に、茶をいれることは一般的であり、それは鎌倉時代の史料からも確認することができます。

さて、道元禅師はどこで茶のことを習っていたのでしょうか？一つは入宋前の博多が考えられますが、行程が順調であったとしても、二・三週間の滞在と考えられます。お茶を飲んだ機会はあったかもしれませんが、ちよつとした留学の準備だけですぐに時間が過ぎてしまいそうです。

一方、道元禅師が荣西禅師に参じたのが十五歳頃で、その後の十八歳から二十四歳までを建仁寺の僧侶として過ごしました。やはり、建仁寺で茶を飲んで学んでいたと考えるところ、とても自然な気がするのです。日本最初の茶書であり、茶の葉としての効用を紹介した『喫茶養生記』を記し、宋朝式の禅の修行生活を導入していた荣西禅師のもとで、お茶を飲まない修行生活であったとはなかなか考

えられません。

さて、その道元禅師が最初にお茶を飲んだのはいつだろうかと考えてみると、道元禅師が荣西禅師に入室して指導を受けていることはとても重要です。道元禅師は、「千光禅師（荣西禅師）の室に入り、初めて臨済の宗風を聞く」（『宝慶記』）と天童山景德寺の如浄禅師に伝えていきます。天童山千仏閣の再建に尽力した荣西禅師は、当時の天童山でも知られた僧侶でした。道元禅師は荣西禅師に入室した際、荣西禅師からお茶をいれてもらったのではないかと考えられるのです。

荣西禅師のお茶が、道元禅師に継承されているのかもしれないと考えると、二人の高僧の師弟関係はより興味深く思います。

館 隆志（たちりゅうし）

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。駒澤大学専任講師、花園大学国際禅学研究所客員研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭溪道隆禅師全集』第一卷（共編、思文閣出版）。